

# 緩和ケアニュース

第53号

緩和ケアにおける薬剤師の関わりについて



9 棟屋上庭園 Photo Takashi Imamura

公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構  
倉敷中央病院 緩和ケアチーム  
2023年7月発行

## はじめに

少し古いお話になりますが、3年ほど前に石原さとみさん主演の「アンサングシンデレラ」という、病院薬剤師が主役のドラマが放送されました。今まで医療ドラマの主役は医師や看護師、そもそも薬剤師なんて役柄としても出てこない、ということも多かったので、薬剤師が主役としてスポットライトを浴びることに薬剤師業界が大いに盛り上がっていたことを記憶しています。(残念ながら薬剤師業界の盛り上がりも虚しく、視聴率はあまり振るわなかったようですが…) タイトルにあるアンサング (unsung) は日本語で「讃えられない」を意味しますが、unsung を用いた英語の慣用句に、「縁の下の力持ち」を意味する unsung hero (アンサングヒーロー) という言葉があります。今回は、医師や看護師のように目立たないけれども、縁の下から医療を支える薬剤師についてご紹介させていただきます。

### ●病院薬剤師ってどんな仕事？

病院薬剤師は、お薬の専門家として下記のような業務を行っています。

#### 【薬剤管理指導業務】

患者さんに、お薬の効能・副作用・使い方・日常生活での注意点などの情報を提供する業務です。また、お薬に関する相談にのることや、アドバイスを行うこともあります。さらに当院では入院中に使用したお薬について、患者さんのかかりつけ薬局にお手紙でお知らせをするなど、地域の薬局との連携も行っています。

#### 【調剤業務】

医師からの処方せんに基づいて、お薬を調剤する業務です。処方せんの内容を確認し、お薬の種類や量が適切であるか、また患者さんが無理なく飲むことができるかをチェックし、問題がないと判断したのちに調剤を行います。当院では、より安全にお薬を使っただけけるよう、患者さんの体の状態に対してお薬が適切であるかを判断するシステムを導入しています。また、調剤をする際に間違いがないように、お薬のバーコードを読み取る機械や、自動で粉薬を調剤してくれるロボット、抗がん剤の点滴を混ぜてくれるロボットなどたくさんの機械も導入しています。



←粉薬を自動で調剤するロボット



↑抗がん剤を自動で調製するロボット

#### 【ボーダレス医療チーム】

病院の中では患者さんに最適な医療を提供することを目的とし、医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士、作業療法士、臨床心理士、ソーシャルワーカーなど複数の職種が協力して専門チームを作っています。当院に





も栄養サポートチームや感染対策チームなど、いろいろなチームが存在しますが、当ニュースを発行している緩和ケアチームもその中の一つです。このようなチームの中でも薬剤師は薬に関する専門知識を用い、様々な職種と情報共有や意見交換を行っています。

他にも救急救命センターや手術室での業務や医薬品の購入や品質管理に関する業務、薬物血中濃度（体の中のお薬の量）を測定する業務など、病院の中だけでも薬剤師の業務は非常に多岐に渡っています。

### ●薬剤師と緩和ケアの関わりについて

緩和ケア領域においても薬剤師が行うことは前述の内容と基本的に大きくは変わりませんが、日々症状が変化される患者さんや、ご高齢の方も多く、より細やかな介入が必要となる場合も多いです。また患者さんがご自分でお薬の管理ができないために、ご自宅で介助をしてくださるご家族へ協力をお願いする場合があります。ここでは具体的な事例を挙げてご紹介させていただきます。

#### 【ケース1】

食道癌の患者さん。がんが大きくなり食道が狭くなってきていたため、食事だけでなく錠剤も飲み込むのがつらくなってきたという相談を受けました。

使っていた痛み止めの錠剤は12時間かけてゆっくり効果が出る薬だったため、錠剤をつぶすことはできませんでした（※次ページ参照）。医師と相談し、貼り薬へ変更することとなりました。

#### 【ケース2】

最期は自宅で迎えたいとのご希望があった患者さん。「できる限り自分でお薬を管理したい」というお気持ちがあるものの、なかなか難しいことが予想されました。そこでお薬の内容を見直し、必要なお薬を厳選することで種類を減らし、また飲むタイミングを統一する、などの対策を行い、在宅訪問を行っている薬局へ引継ぎを行いました。その薬局は1週間ごとに配薬用のカレンダーにお薬をセットして家まで届けてくれる薬局だったので、ご自宅でも引き続き問題なくお薬が飲めたようです。

#### 【ケース3】

1日3回、朝昼夕の食後に痛み止めを飲んでいる患者さん。「日中に痛みはほとんどないが夜中に痛みで目が覚めることがある」と相談を受けました。患者さんが飲まれていた薬は6時間後にはほぼ効果がなくなっていると考えられるお薬だったので、痛み止めを飲むタイミングを昼夕の食後と寝る前に変更してみたところ、痛みで目が覚めることがなくなったそうです。

このように、患者さんが抱えていらっしゃる問題は一人ひとり異なります。お薬での困りごとを少しでも減らせるように、一緒に対策を考えていきたいと思っていますので、どんなに小さなことでもお気軽にご相談いただければと思います。

また当院では緩和ケアに関わる薬剤師の中に「緩和薬物療法認定薬剤師」といった専門の資格を持っている薬剤師がいます。資格取得には所定の研修を受けていることや、研究発表を行っていること、一定期間以上の実務経験や筆記試験等々、多くの要件を満たすことが求められますが、専門資格取得後は緩和医療の現場におい





て、高度な専門性を発揮し、病気や治療に伴う患者さんの症状や苦しみを緩和するための医療サポートを行っています。

**※その薬、つぶす前に確認を！**

錠剤が飲み込みにくいため、つぶしたり割ったりして飲まれている方もいらっしゃるかと思いますが、一部つぶしてはいけないお薬がありますのでご注意ください。つぶすことができるお薬であれば調剤の段階でつぶしてお渡しすることもできますし、お薬の変更も検討できますので、つぶす前には必ず一度薬剤師へご確認ください。

**例1) 徐放錠**：薬の成分がゆっくりと溶け出すように設計された薬です。つぶしてしまうと体の中のお薬の量が一気に増えてしまうため、副作用が出やすくなります。

**例2) フィルムコーティング錠**：苦みや刺激が強い、またはお薬の成分が光に弱いなどの理由でコーティングされている薬です。つぶしてしまうと強い刺激があったり、薬の効果がなくなったりすることがあります。

**●医療用麻薬を使われている患者さんへ**

**～薬剤師外来のご紹介～**

当院では医療用麻薬を使用されている患者さんを対象に薬剤師外来を開設しています。これは、医師の診察の前に薬剤師と面談を行うことで、より詳しく薬の効果や副作用についてお伺いするための取り組みです。日々の痛みを記録する「痛みの日記帳」だけでなく、最近では診察の1週間前から前日を目安に、スマートフォンより症状を入力していただき、直接医療者へ効果や副作用を報告できるサービスも開始となっております。また副作用などでお困りのことがあればお電話や1-17番お薬窓口での直接のご相談も受け付けております。



**●最後に**

昨年9月より薬剤師のユニフォームが白衣からミストグリーンのスクラブに変更となりました。今までよりも見つけやすくなっておりますので、見かけたらぜひお気軽にご相談ください。



**編集後記**

薬剤師の存在を知らない人は少ないけれど実際にどのような役割をしているかを知らない人は多いのではないかと、そういった観点から緩和ケアチームの福島さやか薬剤師が執筆しました。緩和ケアチームはいろいろな職種が活動しており、これからもその役割を紹介していく機会を設けたいと考えています。

発行元：公益財団法人 大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院 緩和ケアチーム

編集委員長：佐野 薫（医師）

編集委員：伊墻 美幸（薬剤師） 酒井 清裕（医師） 平田 佳子（看護師） 雪吉 孝子（事務） 50音順

